

公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	下関市こども発達センター どーなつ		
○保護者評価実施期間	2025年 12月 5日		～ 2025年 12月 25日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	118	(回答者数) 83
○従業者評価実施期間	2025年 12月 5日		～ 2025年 12月 25日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	10	(回答者数) 10
○事業者向け自己評価表作成日	2025年 月 日		

## ○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	多職種が連携することで様々な専門的観点から支援方法やアプローチを考えることができる。	年間を通したプログラムに作業療法士、言語指導員、臨床心理士が療育に参加し、それぞれの分野から利用児個々の評価や療育への助言を受ける機会を設定している。さらに家庭支援として、保護者研修や療育後の振り返りにおいても助言を受けている。	アセスメントをより療育に生かせるように努めたい。研修時期や研修内容について、職員全員の共有を図りたい。特に新規職員については保護者研修への参加も促したい。
2	療育後に保護者への振り返りを行っている。 療育内容、利用児の成長を理解していただくためビデオに録画し解説することでより良い親子関係、子育てへのヒントにつなげている。	その日の活動のねらいを伝え、子どもの成長した点を主に解説している。 子どもの気持ちを代弁しながら、どのようにしたらできたのか支援者が行った支援方法について伝える機会にしている。	集団のビデオ映像の中では伝わらなかった事柄を保護者に個別フォローしていくことも必要となる。また、生活の中での困り感と照らし合わせたり、幼稚園・保育園での支援へとつなげていけるよう努めていきたい。
3	療育後にミーティングを行い、その日の療育内容と個々の課題点、支援目標について話しをしている。	療育のねらいや利用児個々の今後の課題について話しをしている。集団での療育の進め方や個々に合った視覚支援の方法、介助の方法や量について毎回検討し、次回の療育につなげている。	運動や言葉の個別指導で学んだことを集団の中で般化できるよう、多職種と連携をとり療育の充実を図りたい。 コミュニケーション支援として、PECSなど利用しながら適切な方法で自発的な発信ができるよう支援していきたい。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	クールダウンが必要、または個別対応が必要な子どもが利用する部屋がない。	定員に対して部屋数が少ないため、個別の対応をする空間がない。	現時点では、廊下や訓練室、相談室の空き状況を見ながら利用している。少しでも視覚、聴覚情報を調整し安心して過ごせる空間を作りたい。
2	利用人数が増え、同時に個別対応を必要とする子どもも増えている。それに対して、経験を生かせる職員が少ない。	対応する職員が固定されている。	療育後の職員間のミーティングの方法を見直す。課題を把握したうえで具体的な支援のアイデアを出し合えるよう進めていき、その後の経過も共有できるよう進めていきたい。対応した職員が経験のある職員に相談できる環境を作りたい。
3	限られた勤務時間、勤務日数の中で療育に当たる職員が多く、前回の療育場面を共有していないため時間内での細かい情報の周知徹底が難しい。また、外部研修に参加する機会が少なく知識や情報の共有が難しい。	非正規職員が多い。	状況説明、周知をするために多くの時間を費やしている。非正規職員は自ら情報を確認することを習慣づけ、出勤したら必ず閲覧してから業務開始できるよう周知していきたい。経験年数に応じた研修の受講をすすめたい。継続的な支援ができるよう職員の勤務体制の見直しを必要とする。